

習得から活用型授業へ ～「世界平和の実現をめざして」～

立命館大学 関西大学中等部 河原和之

はじめに

授業は楽しくなければならぬ。その条件は「教材のおもしろさ」「知的興奮」「対話」の三つに集約される。そして、「暗記社会科」から脱皮し、「思考力」「判断力」「表現力」を培う授業へと変革することも大切だ。また、“できる子”に必要なのは「活用・探求」力、“できない子”には「習得」ということではなく、すべての生徒が“楽しくわかり”そして、「思考力」「判断力」「表現力」をつける授業を展開する必要がある。本小論は、「荒れ」や「学習意欲」のないなかで、「習得」さえままならない中学校現場にあって、子どもが意欲的に取り組む授業についての提案である。

今回は『社会科 中学生の公民』（以下、教科書）第4部1章「世界平和の実現をめざして」単元を扱う。本単元は3年生の年度末にあたるため、じっくり取り組めない場合も多い。だが、ここで扱う内容は現代社会を生きる私たちにとってとても重要だ。生徒の興味・関心を引き出しながら楽しく進めていきたい。以下、2～4で三つの授業実践スタイルを提示する。

2 「楽しく習得」実践例

本単元の導入として、私は次のようなテーマ設定で授業をはじめます。

①カスピ海は海それとも湖？（領海）

- ②「南鳥島」って誰が住んでるの？（領土）
- ③国際連合総会では何語でしゃべっているの？（国連のしくみ）
- ④海外向けの粉ミルクはどんなパッケージ？（国連の仕事）
- ⑤「民主化」のための戦争って許されるの？（今なお解決しない戦争）
- ⑥カンボジアのお札に書かれているデザインは？（日本の国際貢献）

以上のような、生徒が「知りたい」「一言いいたい」と学習意欲を喚起し、「ウソッ！ほんと」と基礎知識を定着させられるテーマ設定が不可欠である。紙数の関係で③のみについて具体的に紹介したい。

まず、『国連総会で話し合いをする時、何語で話しているのか？』と問う。「自国語でしゃべれば、同時通訳してくれる」「自国語でしゃべると英語に通訳されるのでは」という答え。

そして、『1973年までは5か国語が公用語だった。その5か国語とは何か』と問い、ノートに書かせる。英語、中国語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、イタリア語等多様な意見がでてくる。答えは、常任理事国の言語で、英語、フランス語、ロシア語、中国語であり、そして創設当時20以上の加盟国の国語だったスペイン語である。ドイツ語、イタリア語が公用語ではないことから、国連設立当初、第二次世界大戦戦勝国側が中心であったことを確認する。

さらに『1973年から、公用語が一つ増えた。何語か？』と問う。答えは、アラビア語だ。

1973年といえば、オイルショックがあったところだ。アラブ諸国のパワーが強まり、発展途上国の圧倒的な支持を得て、総会、安全保障理事会、経済社会理事会における公用語化に成功した。つまり今はこの6か国語が公用語だが、ただし、同時通訳を自前で用意すれば自国語での発言が許され、これが公用語で議場に流れるようになっていく。日本の首相や外相が総会で演説するときにはたいていこの方法で日本語の原稿を読み上げている。

『拒否権』については、『アドバンス中学公民資料集』（以下、『アドバンス』p.113）の「**3** 常任理事国の拒否権行使回数」のグラフをしめし、その動向を学習した。

「総会では何語でしゃべっているのか」を掘り下げることによって国連のしくみの学習につなげることができる。このように、学習者のちょっとした疑問から授業をつくっていくことが大切である。

3 「多様な方法を使った習得型授業」実践例

次に、習得型授業実践例を提示する。ここではEU統合を取り上げる。

① チョコレートとEU

EU統合で「**B** EU統合で『チョコレート戦争』?」という『アドバンス』（p.114）の資料を紹介し、チョコレート一つとっても、カカオの成分などで、意見が一致しないことから統合の困難さを導入にする。

② なぜEUは統合しようとしたのか?

次の5問の国名クイズから、ヨーロッパの過去と現代の状況を把握し、なぜ統合しようとしているのかを考えさせる。

<国名クイズ>

- ① 第一回オリンピックが開催された国
- ② 過去においては無敵艦隊をもち、南アメリカを植民地にしていく国

- ③ 産業革命が最初に起きた国
- ④ 第二次世界大戦で日本と同盟を組んでイギリス、オランダやアメリカと戦争をしていた国は、ドイツとどこの国か
- ⑤ 過去においては東西に分裂していた国

答え：①ギリシャ ②スペイン ③イギリス ④イタリア ⑤ドイツ

このクイズから、なぜヨーロッパが統合しようとしているのかを、「**4** おもな国と地域機構の比較」（『アドバンス』p.115）とともに考えさせる。

「多くの植民地をもっていた」「対立をしていた」「過去には栄光の国だった」「統合により日本やアメリカに近づける」など。ここから、戦争や対立をなくし、経済的にもアメリカ合衆国や日本に追いつくことをねらいに統合しようとしていることをおさえさせる。

③ EU統合って何?

次に、統合したことによる社会の変化を確認する。

<○×クイズ>

- ① 1か国で発行された運転免許証はどこの国でも有効
- ② 1か国で発行された教員免許状はどこの国でも有効
- ③ 加盟国すべてが統一貨幣「ユーロ」を使っている
- ④ 国境をこえるときパスポートがいらない
- ⑤ どこの国で働いてもよく、年間少なくとも4週間の有給休暇がとれる

答え：③以外はすべて○。

ここでは、○×クイズというすべての生徒が参加できる手法により、統合の現状を理解させる。

④ 統合にむけた課題

最後に、統合にむけた苦勞や課題について考える。キリスト教文化のヨーロッパにおいても、国によっては、生活や文化の違いがある。宗教が異なればなおさらである。また、経済

格差は、その格差をうめるための財政支出を必要とする。経済状況の異なる国との統合によって覇権の問題や人口流出の問題も起こる。EU圏内での異文化エピソードとして、「YESの場合は首を横にふるブルガリア」「すべてのバス停の表示が“バス停”のマルタ」「発泡酒を認めなかったドイツ」「宝くじを認めなかったイギリス」など興味ある題材を使った。

『国民1人あたりのGDPで比較するとEU平均を100とした場合、最も裕福なルクセンブルクは280であるのに対し、最貧国のブルガリアは37です。このように国々に格差があると、どんな問題が起こるだろう』と問う。

「紛争が起こる」「うらやましくなったりする」「貧しい国から豊かな国へ移住してくる人がでてくる」などの返答。EU予算全体の4分の1が、この格差是正のための予算であり、統合のためには財政的な援助が必要である。

そして、「トルコ」が加盟候補国であることを確認し、イスラム教による考え方の違いや、人口が多い国であるから移住者が多くなることが心配されていることを学習する。

まとめは、2007年3月25日に出されたローマ条約調印50周年を記念する宣言（ベルリン宣言）の（ ）にあてはまる言葉を考えさせる。

「ヨーロッパの統一は（ ）と（ ）を可能にした。」

答えは「平和」「繁栄」である。

4 「ミニ討論による活用型授業」実践例 ～核兵器完全廃絶は可能か？～

黒板に、右側を伏せたアメリカとソ連（ロシア）の核兵器の年次ごとのグラフを示し、その後のグラフの変化を書きに来させる。そして、『1965年ごろまで増えているのはなぜか』と問う。「冷戦時代でアメリカとソ連が対立していたから」「お互い核兵器で相手を

ビビらそうとしていた」との答え。

『それ以降、核兵器が減ってきた要因は何か』と問い、プリントに書かせる。「冷戦が崩壊したから」「日本をはじめとする国が核兵器に反対をしたから」「国連などで核兵器を減らそうとする動きがあったから」「大国どうしの戦争がなくなってきたから」など。

そして、教科書p.176の『核兵器を保有する国』の地図から、国連の常任理事国の5か国が核を保有していることを確認し、『なぜ、北朝鮮、イスラエル、パキスタン、インドなどは核兵器を保有しているか』と問う。「インドとパキスタンは隣どうしで相手をビビらすため」「イスラエルはアメリカが認めている」「イラク、イランは中東戦争というのが何回も起こっていてアラブ諸国と対立している」「北朝鮮は、アメリカなどに対する牽制」など。

<ミニ討論 核兵器はなくなるか>

核兵器廃絶の見通しについて考える。軍縮の動きを学習したあと、2009年4月5日チェコのプラハで行ったアメリカ、オバマ大統領の演説（『アドバンス』p.110^B）や日本における福島原発事故以降広がる脱原発の動きを紹介する。

①黒板の右側に「なくなる」、左側に「なくならない」と書く。ポストイットに自分の意見を書き、それを黒板に貼りに来させる。

※生徒36名のうち、2名が「なくなる」という意見をもった。

<なくなる>派の理由

- ・なくなる、なくならないより、なくさないといけない
- ・世界で大きい戦争や紛争がなくなり軍縮の動きがあるから

<なくならない>派の理由

- ・隣国に脅威があるかぎり全廃できない
- ・全廃するにはお金がかかる
- ・核があるからこそ平和を維持できる

- ・内戦や民族紛争があるかぎりなくならない
- ・資源確保のために核は必要
- ・人間に自負心や欲があるから全廃は無理
- ・他国からの圧力が軽くなり、逆に圧力をかけられる
- ・アメリカは本当に核兵器をなくす気がない

②数名を選び発表させる

＜なくなる＞派の意見（一部）

なにもしないですくすことはできないが、人類は大きい戦争を体験しているので、主要国は安易に核兵器を使わないと思う。唯一の被爆国である日本が先頭に立って取り組むべきだ。

＜なくなるならない＞派の意見（一部）

一度核兵器のもたらす兵器としての力と政治に及ぼす力の大きさを知ってしまうと、最終的に手放すことができなくなってしまうと思う。

③意見交流後、再度ポストイットに意見を書き、黒板に貼りに来させる。

「なくなる」派が少し増える。意見が大きく変化した生徒に発表させる。

④「核兵器をなくすためには」どうすればよいか、考えを書く

（意見例）

私は核兵器をなくす方法を5点にまとめました。一つは核兵器をなくす運動を粘り強く続けることです。とくに唯一の被爆国の日本が呼び掛けることが大切です。二つめは、根本的な原因をなくすことです。世界から貧困と紛争をなくすことです。とくに北朝鮮と韓国の統一は大切です。三つめは、国連が頑張ることです。非核三原則を世界が決意することです。四つめは、あまりしたくないですが、制裁も大切です。経済封鎖もふくめ制裁をやらないうつまでもなくなりません。最後に、現代の核拡散防止条約（NPT）で5か国に核兵器を認めていること自体がおかしいです。

この条約の撤廃が必要です。

5 おわりに

2012年8月31日『朝日新聞』朝刊（関西版）に「ルワンダ民族対立超え 内戦で負傷 今はタッグ」という記事が掲載された。この記事から授業をつくることも可能だ。同じ国の中でかつては憎しみあった二人が、今はお互いに国を代表して一つのボールを追う。8月30日に行われたパラリンピックのシッティングバレーの記事である。授業では、掲載されている「座りながらバレーをしている」写真から『何をしているのか』『なぜ足を負傷したのか』と問いながら、ルワンダ内戦を学習し、次の二人の言葉を考えさせる。ビジマナ選手は『「俺を撃ったのはルコンドだ』と冗談で話しているよ」「過去は振り返らず、未来を見据えたい」と。内戦、紛争を超えた二人の友情から“平和”について考えさせたい。

評価については、「EU統合」に興味をもち理解できたかという「興味・関心」「知識・理解」の側面と、「EUの理念や課題」等の「思考・判断力」、また「核兵器廃絶」については、その「可能性」を根拠だてて説明できることが大切である。

本論では、生徒の興味関心を引き出し、「思考力」「判断力」「表現力」を身につけるような授業実践例を三つ紹介した。さまざまな言語活動を取り入れることで習得から活用まで幅広い授業実践が可能になる。参考にしていただければ幸いだ。

＜参考文献＞

- 庄司克宏『欧州連合』（岩波新書）2007年
- 日本経済新聞社編『ところ変われば』（日経ビジネス人文庫）2010年
- 河原和之『100万人が受けた「中学地理」ウソ・ホント？授業』（明治図書）2012年
- 河原和之『100万人が受けた「中学公民」ウソ・ホント？授業』（明治図書）2012年